

海洋教育 2022
海洋教育に関する挑戦園・挑戦校
実践事例

令和4年度～（1年目）

1	小泉幼稚園	気仙沼の海大好き！“うみのわくわくたうん” ～地域環境を生かした遊びの展開～
2	大島小学校	緑の真珠プロジェクト ～見つめよう大島 考えようわたしたちの海～
3	面瀬小学校	ふるさと気仙沼の海
4	大谷中学校	海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう

気仙沼の海大好き！“うみのわくわくたうん”

～地域環境を生かした遊びの展開～

1 キーワード（※自園・自校の海洋教育の実践内容を端的に表す短いキーワードを3点程度）

友 達：「海で夢中になって遊ぶ体験」「海の様子や事象・生き物・海産物などのふしぎにふれる体験」「魚や海産物を食する体験」…全園児

「海洋教育子どもサミット in 小泉海岸」…公立幼稚園5園年長児の海交流

家 庭：「親子で生きた魚にふれる体験」「親子で魚を食する体験」「親子海洋教室」…全園児

地 域：「養殖場見学・体験」「魚市場・海の市見学」…全園児

「公民館漁具見学」「地域企業漁店見学」「鮮魚店訪問」…年長児

専門家：「手紙交流」…全園児 「リモート交流」…年長児

遊 び：「体験を基にした制作遊び・表現遊び・ごっこ遊び」

「海の宝物や海洋ごみを活用した制作遊び」…年長児を中心に

2 海洋教育のねらい（※自園・自校が海洋教育を通して育みたい資質・能力〔海洋リテラシーを含む〕）

- (1) 五感を使って思いきり海で遊ぶことを楽しみ、様々な気づきや発見、事象や生き物との出会いを通して地域の海への関心を高める。（年少児・年中児）
- (2) 地域の海、様々な友達や海に関わる人との出会いを喜び、五感を使って海で遊ぶ楽しさやおもしろさを感じながら、地域の海に対する親しみの気持ちをもつ。（年長児）
- (3) 遊びや体験を通して好奇心や探究心を高め、体験から得た様々な気づきや思いを遊びや生活に生かす楽しさを味わう。（全園児）
- (4) 海で働く人との関わりや海の幸を食する機会を通して海の豊かさを感じるとともに、働く人への親しみと憧れの気持ちをもつ。（全園児）

3 海洋教育のねらい設定に込めた思い・背景（※自園・自校の海洋教育の特色や設定理由、意図についての説明。自園・自校の児童生徒や地域の実態、背景、願いなどについての説明。）

これまで取り組んできた遊びや体験を通して、幼児は様々な気づきや発見を楽しみ、海で遊ぶ楽しさやおもしろさ、不思議さを感じ、「海は楽しいところ！」という思いを抱いている。また、体験後に見たり聞いたり感じたりしたことを遊びに生かし、様々な制作遊びやごっこ遊びを展開する過程を通して学びを積み重ねてきたことで、幼児の海への関心は大きく高まっている。

一方で、「海洋教育子どもサミット」での体験を含め、砂浜遊びや磯遊びなど様々な海の違いを感じながら存分に海で遊ぶ楽しさを味わうことができたのは年長児であり、年少児・年中児においては小学生と一緒に小泉の海での活動に参加はしたものの、海の開放感を味わいながら思いきり遊ぶ体験を取り入れることはできなかった。

そこで今年度は、全園児が五感を活用しながら海での遊びを存分に楽しめる機会を取り入れ、地域の海・気仙沼の海への親しみの気持ちを育みながら、好奇心や探究心を高めていきたいと考えた。

更には、発達段階に応じた遊びや体験、地域の人との関わりの工夫を通して、幼児の実態に即した学びの積み重ねを大切にしていきたいと考え、学年別のねらいも設定した。

4 今年度、海洋教育に取り組んで達成したことや充実を感じたこと（※資質・能力面で／児童生徒の姿で／探究的な学び、行動化にかかわって／教員にとって／地域にとってなど）

○全園児が存分に海での遊びを楽しめる機会を設けたことで、全身を濡らして砂浜遊びを楽しんだり、石を起こしながら夢中になって生き物探しをしたりする姿が見られた。幼児が様々な気付きや発見を楽しみながら五感を使って遊ぶ様子、つぶやき、友達同士の会話などから、幼児にとって身近な環境の一つである海は幼児の心を解放させ、様々な遊びの意欲や好奇心、探究心を育むことにつながるということを実感した。

○それぞれの発達段階に応じたねらいを設定したことで、幼児に無理をさせることなくそれぞれの興味関心に沿った遊びや体験活動を実施することができた。このことから、体験後の園生活においても幼児のそれぞれの幼児が興味を示したことを遊びに生かし、友達と思いを共有したり体験を思い出したりしながら思いを表現して遊ぶ姿が多く見られた。（うみのわくわくたうんどっこ）

○幼児の興味や関心の所在に応じて海に関わる地域の方の協力を得たことで、疑問に感じたことが解決する喜びを味わったり更に関心を広げたりすることができた。また、安心して関われる体制が図られたことは、自分なりに必要性を感じながら積極的に関わりを求めようとする幼児の姿につながったと考える。

○市立幼稚園年長児の海交流「海洋教育こどもサミット in 小泉海岸」の実施においては、昨年度課題としていたサミット後の関わりについても重視し取り組んできた。顔写真交流やオンライン交流などの事前事後交流を工夫したことで幼児同士の思いが深まり、自ら手紙を書いたりプレゼントを制作したりする姿が多く見られた。これらのことから、海を通した学びや関わりにプラスして「相手を思う心の育ち」が見られた交流となった。

5 海洋教育に関して困っていること、今年度、課題を感じたこと（※上記4と同様）

○この一年の取組と幼児の成長、変容から振り返ると、幼児期における海洋教育ではどのように海と出会い関わっていくかが重要であり、幼児が存分に遊びや体験を楽しむ過程を通して好奇心や探究心、主体性が育まれていくことがわかった。幼児の遊びや体験がリテラシーに直結するものではないことを踏まえ、幼児の身近にある「海」という地域環境を生かし幼児の興味関心をどのようにつないでいくか、幼児の姿や思いをどのように見取っていくかを考えていく必要がある。

6 ツールについて（※新たなものや特色あるものでなくても、アイデアや使った道具など。副読本や教科書、各園や各校で作成する全体計画や指導計画、指導案でも可。）

(1) ツールの名前：「ふしぎノートの活用」（年長児）

(2) 使ったタイミングや状況：幼児の気付きや疑問を友達と共有したり一緒に調べたりするきっかけとなるよう、1冊の自由帳を準備した。始めは担任が間に入って活用していたが、友達と一緒に調べたりわかった喜びを共有したりすることを楽しめるようになるよう、自分達で準備をし、円になって相談したり考えたりするようになった。主体的に探求するきっかけになる教材となった。

海洋教育 2学期活動計画

	8月	9月	10月	11月	12月	3学期
【幼稚園】 年少児						
年中児						
年長児	<p>○漁具見学をしよう！(8/26)</p> <ul style="list-style-type: none"> 小泉公民館展示品を見る ○砂浜ノートを見よう！ 海のいろいろを知る 	<p>○小泉海岸の干潟をつくろう！ (自由遊び縦割りの活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> 干潟を再現して遊ぶ 海の生き物をつくって遊ぶ <p>○磯遊びごっこをしよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 海の生き物探し 貝殻あそび など 	<p>○海の博物館をつくろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> いろいろな生き物づくり ビーチコーミングづくり 博物館づくり など <p>○小泉幼之芽組をつくろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 養殖いかだづくり 養殖場づくり など <p>○海上保安庁ごっこをしよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 魚の住処づくり 海クイズの相談 など <p>(意図的な縦割りのグループ活動)</p>	<p>【幼稚園ウィーク in 小泉幼】 ○うみのわくわくたうんごっこをしよう！(11/11) (希望縦割りのグループ活動)</p> <p>*海の博物館の館長さんになろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 年長児の不思議ノート 展示コーナー 海に関する作品、絵 展示コーナー ビーチコーミング 体験コーナー 海のクイズコーナー <p>*養殖の先生になろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ワカメの種付けごっこ 体験コーナー 養殖いかだコーナー <p>*小泉海上保安庁の長官さんになろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 魚の住処守り隊 体験コーナー 海の生き物探し 体験コーナー 	<p>○海のわくわく絵本(仮)をつくろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年間の海に関する活動や遊びを振り返り、取組の集大成として年長児が中心となって作成 <p>絵本の内容(案)</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児のこれまでの作品画像等を生かして… 気仙沼のわくわく探検ストーリー 気仙沼の海紹介・観光マップ風 スタンプラリー風 気仙沼の海物語風 <p>…など幼児の実態に合わせて作成</p> <p>○関係者に配布</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者 協力者 <p>○次年度活用</p>	
全園児		<p>○干潟遊びをしよう！(9/13)</p> <ul style="list-style-type: none"> 小泉海岸の干潟や海の生き物を知る 海岸のごみの多さに気付く 	<p>○秋の遠足に行こう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 海の市のお店を知る 海に関する作品、商品を見学する <p>○蔵内之芽組見学をしよう！(10月下旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> ワカメの種付け体験をする 	<p>○「海を守ろう！」探検隊(10/19 保育参観日)</p> <ul style="list-style-type: none"> 海上保安庁訪問依頼 遊びを通して海洋ごみ問題を知る 	<p>○おうちの皆さんや、海の博士、海の先生方を招待しよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 海の博士(みなとラボ)の先生 連携センター 笹川財団 海洋教育推進校 など 	
【保護者】	<p>○海洋だより</p> <ul style="list-style-type: none"> 1学期の活動、遊び特集号配布 幼児の変容アンケート 					
【関係者】	<p>環境構成として…</p> <ul style="list-style-type: none"> ドキュメンテーションの掲示 共通制作コーナー準備 SDGs コーナー準備 	<p>○海の博士に伝えよう！(年長児)</p> <ul style="list-style-type: none"> 海の博士とのオンライン交流 自分たちが体験したこと、わかったことなどについて海の博士に伝達する 感想を聞く → 新たな発見 	<p>○海上保安庁の方と交流しよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> お礼の手紙作成(全園児) インタビュー(年長児) など 	<p>○幼稚園ウィークに招待しよう！(年長児)</p> <ul style="list-style-type: none"> 招待状作成、オンライン案内など 		

海洋教育子どもサミットin小泉海岸(幼稚園交流) 実施計画 (案)

気仙沼市立小泉幼稚園

- 1 日 時：令和4年6月1日(水)
 9時30分～12時15分 *干潮時間…10:32
 ※雨天等…2日(木)に延期 *干潮時間…11:11
- 2 ねらい：○海に対する親しみの気持ちを持ち、五感を活用しながら夢中になって遊ぶ楽しさを味わう。(健康・環境・表現)
 ○砂の感触や海水(波)の感触を味わい、様々な気付きや発見を楽しみながら好奇心や探求心を高める。(環境・言葉・表現)
 ○遊びを通して同年代の友達とのふれ合いを楽しみ、一緒に見たり触れたり試したりして遊ぶことを楽しむ。(人間関係・言葉・表現)
 (五領域との関連)
- 3 「海洋リテラシーfor 気仙沼」との関連(海洋リテラシーfor 小泉幼稚園)
- 「A 海と出会い、なかよくなる a」
- ・砂浜で夢中になって遊ぶことを通して、気仙沼の海に対する親しみの気持ちをもつ。
 - ・海水の気持ちよさ、波の動きや砂から湧き出る海水の不思議さに触れ、見たり触れたり、試したりして遊ぶ。
 - ・磯の匂いや風の心地よさを肌で感じたり、広い砂浜の美しさに気付いたりする。
- 「A 海と出会い、なかよくなる b」
- ・友達と一緒に地域の海で遊ぶ楽しさを感じながら、様々な発見や気付きを楽しみ、好奇心や探求心を高める。
 - ・貝殻や漂流物(海藻や海洋ごみ)等の発見や気付きを基に、幼児なりに思いや考えをもつ。
- 「B 海の恵みを知る b」
- ・砂浜で生きる貝や生き物の発見を喜び、見たり触れたり観察したりする。
 - ・気付いたことや感じたこと、疑問に思ったことを言葉で伝えたり、様々な方法で表現したりする。

3 参加者：各園年長児・職員

今年度の見守り隊は、地域の方に依頼し、幼稚園の取組や園児の様子を知っていただく機会とする。

園 名	参加園児数	参加職員数	保護者見守り隊
唐桑幼稚園	7名	3名	
松園幼稚園	6名	3名	
大谷幼稚園	19名	4名	
津谷幼稚園	17名	4名	
小泉幼稚園	7名	4名	8名
合 計	56名	名18名	8名

4 日 程：

- 9：30 小泉海岸 到着（各園ジャンボタクシー・小型タクシー）
・各園合流 ・排泄 ・水分補給 等
- 9：45 なかよしタイム① 進行：小泉幼稚園
・小泉幼稚園 園長先生のあいさつ
・顔合わせ
・小泉海岸の“わくわく”を教えよう（小泉幼稚園）
・約束確認
- 10：00 みんなで遊ぼう！（砂浜遊び・散策）
「いろいろなお友達と一緒に、砂浜遊びを楽しもう」 *自由に遊ぶ
・波と追いかけてっこをする。（海水の冷たさ・動きの不思議さ 等）
・砂を掘る。（砂の感触・海水が湧き出てくる様子 等）
・穴に海水をためて、温泉ごっこをする。
・貝殻を見つける。
・生き物を見つける、触れる。
・漂流物（海藻・流木・海洋ごみ等）を見つける、触れる。
・各幼稚園の友達と一緒に散策する。
- * 随時水分を補給する。
- 10：50 探索終了
・記念集合写真撮影
・テント前に集合 ・水分補給 ・休息
- 11：05 なかよしタイム② 進行：小泉幼稚園
「砂浜遊びの振り返りをしよう！」
・見つけた宝物紹介
・気づきや発見、疑問等の発表
・感想発表 等
・松園幼稚園 園長先生（支部長）のあいさつ
- 11：20 防潮堤の上に移動
・着替え ・排泄 ・昼食準備
- 11：45 昼食（おにぎり弁当）
・防潮堤の上に横に並んで座り、海を眺めながら食べる。
- 12：10 解散準備
・全員で「さようなら」のあいさつ
・各園のジャンボタクシー、小型タクシーに移動
- 12：15 解散 現地出発 各園に戻る

- 5 留意点：*新型コロナウイルス感染拡大防止に努め、移動手段であるジャンボタクシー内での乗車間隔など、極力密にならないよう配慮する。
- *熱中症予防に努め、園児の健康状態を細かく観察するとともに、こまめな休息や水分補給を行う。
- *災害時の避難場所を確保するとともに、緊急時・災害時には、素早い対応がとれるよう車両を待機させておく。(マニュアル作成)
- また、保護者へは、緊急時引き渡しカードやマチコミメールを活用し連絡する。
- *波打ち際で遊ぶ体験も行うことから、安全面には十分に気を付ける。(目の前の園児への対応・全体への目配り・職員間の連携・地域見守り隊協力依頼)
- *砂浜遊びについて、各幼稚園の職員との打ち合わせを行うとともに、事前の下見を行う。
- *砂浜遊びでは、各幼稚園の年長児とのふれ合いを楽しめるよう援助するとともに、子どもたちの五感を働かせた遊び、気付きや発見を重視した活動となるよう援助する。
- 6 準備物： 園 児 → 水筒・おにぎり・シート・着替え・汗拭きタオル・濡れてもよい靴・履き替えの靴・カラー帽子・名札
- 職 員 → 水筒・おにぎり・シート・着替え・濡れてもよい靴・履き替えの靴
タオル・フエ・帽子・携帯
- 各 園 → 救急バッグ・緊急時引き渡し一覧表・大判タオル・ビニール袋
ゴミ袋・カメラ・遊び用バケツ・スコップ・シャベル・箱メガネ
飼育ケース・エチケット袋・濡れタオル・ウェットティッシュ
消毒・ペーパータオル・BOXティッシュ・氷・保冷剤 等
- 小泉幼稚園 → テント・ブルーシート
- 7 その他：*中止の判断は、小泉地域の天候・予報等を基に、当日朝7時45分の時点で決定
- *現地にて天候が悪くなってきた場合や、暑さが厳しい場合等には、状況に応じて時間を短縮する等、臨機応変に対応する。
- *地震や津波等の災害が発生した場合には、直ちに「セブンイレブン本吉津谷バイパス店」の駐車場に避難誘導する。(避難先については、事前に保護者に周知しておく)
- また、屋外活動のため地震発生に気付きにくいことから、地震が発生した場合には、小泉幼稚園より現地にいる職員に連絡を入れる。
- *市子ども家庭課・教育委員会・海洋教育推進連絡室・気仙沼市本吉支所・小泉漁協・海洋教育小泉地域人材関係等に、事前に連絡を入れておく。

「海洋教育子どもサミット in 小泉海岸 事前調査(現地視察)」時までの確認事項

○各園参加者人数（職員）について

○保護者見守り隊の必要の有無について

○実施計画案内容について

- ・日程や内容，現地での昼食について
- ・当日の実施有無の判断時間について

○各園の交通手段について

- ・各園で事前に見積もりを出してもらう。
- ・災害時に備え，ジャンボタクシー等現地で待機してもらえるよう依頼する。
- * 5園の交通費を合わせて10万円を超えなければ，海洋教育の連携予算の方から支出していただけるとのこと。

○事前交流について

- ・交流の持ち方はどうするか（顔写真交換・オンライン交流・手紙等）
- ・オンラインの場合，交流日時，方法（ZOOMのミーティングルーム作成等）について
 - * 小泉幼稚園で，ミーティングルームを作成する予定
- ・顔写真，手紙交換の場合，いつまでに交換するか

○当日の振り返り打ち合わせ会・事後交流について

- ・日程，内容は後日



【クラス懇談会・PTA 研修会・家庭教育学級について】

今年度のPTA研修会（家庭教育学級）は、海洋教育パイオニアスクールプログラム「地域展開・アドバンス部門」の取組の一環として、「親子で地域の海を知る ～魚のふしぎに触れて遊ぼう！～」をテーマに、地域で捕れる生きた魚に触れる体験活動を行います。

これまでの海洋教育に関わる活動を通して、子ども達は、地域の海で遊ぶ楽しさを知り、様々なひと・もの・ことと出会い、発見や気づきを喜んだり、疑問や探求する気持ちをもったりするなど、いろいろな感情を味わいながら地域の海への関心を高めてきました。また、体験から得た学びを基に自分たちの生活や遊びに生かし、再現遊びや様々なごっこ遊びを展開しながら学びを積み重ねてきました。

そこで、まだ生きた魚に直接触れる体験をしたことがない子ども達に、地域の海で捕れる魚に触れて遊ぶ機会をつくり、生きた魚の不思議さや力強さを肌で感じたり、様々な気づきや発見を通して気仙沼の海の豊かさに触れたりする体験になるよう考えております。

また、保護者の皆様からも、海洋教育を通じた保育へのご理解とご支持をいただいたり、親子で取り組むことのできる研修会の希望の声を寄せていただいたりしておりますことから、今回は、親子で生きた魚に触れながら、地域の海を知る研修会を開催することといたしました。変則的な日程となってしまうご不便をおかけする点もあるかと存じますが、ご理解とご協力をくださいますようよろしくお願い申し上げます。

詳しい内容は、次の通りです。



【 参観・クラス懇談会 】

- | | | |
|-------------|--------|--|
| 10:00~10:10 | 受付 | ・玄関よりお入りください。
検温・消毒のご協力をお願いいたします。 |
| 10:10~10:40 | 参観 | ・各クラスにて、お子さんの活動の様子をご覧ください。
・クラスごとに順次ホールにて、午後の研修会に向けた動画を視聴します。 |
| 10:45~11:30 | クラス懇談会 | ・1学期の反省 他 |
| 11:35 | 解散 | ・保護者の皆さんは、一度お帰りいただきます。
・園児は残ってお弁当を食べます。（普通保育） |

裏面もご覧ください。→

【 PTA 研修会(家庭教育学級) 】

- 13:20~13:30 受 付
各クラスのテラスにお集まりください。
- 13:30~13:35 「魚のふしぎに触れて遊ぼう！」
“始まりの会”
*園長あいさつ
*公民館長様あいさつ
*講師紹介
- 13:35~14:00 「生きた魚との触れ合いタイム」
*地域の海で捕れる魚について話を聞く
*親子で生きた魚を見たり, 触れたり, 捕まえたりしながら, 五感を使って様々な気付きや発見を楽しむ
- 14:00~14:15 「公民館移動」
*トイレ, 着替えが終わった親子から, 公民館に移動
*降園の荷物持参
- 14:15~14:35 「魚のお料理タイム」
*親子で魚をさばく様子を見学する
- 14:35~14:50 「おいしいもの試食タイム」
*親子で, さばいた魚を試食する
- 14:50~15:00 「振り返りタイム」
*感想を話す(園児・保護者)
*PTA 会長のあいさつ
- 15:00 終 了
*準備のできた園児より, 順次降園
- 15:05 降園完了

水分補給については、改めて時間を設けず進行しますので、各親子で随時水分補給をしていただきます。
園児は水筒の準備をお願いします。保護者の皆様も飲み物をご準備ください。

海洋教育パイオニアスクールプログラム「地域展開・アドバンス部門」
海洋教育リテラシー挑戦圏としての取組に関する内容

- ねらい： ○地域の海で捕れる魚への関心を高め、五感を活用しながら夢中になって見たり触れたりする楽しさを味わう。 (健康・環境・表現)
- 魚の感触や動きを感じながら様々な気付きや発見を楽しみ、好奇心や探求心を高める。 (環境・言葉・表現)
- 海に関する話を聞いたり質問したりしながら地域の海で働く人と関わり、親しみと憧れの気持ちや、海の仕事への関心を高める。 (人間関係・言葉・表現)

(幼稚園教育要領 五領域との関連)

- 「海洋リテラシーfor 気仙沼」との関連 (海洋リテラシーfor 小泉幼稚園)

「 A 海と出会い、なかよくなる a 」

- ・生きた魚を見たり触れたりすることを通して、五感を活用しながら夢中になって関わり、様々な魚の不思議さを感じる。
- ・生きた魚の力の強さや、動きの速さなどを肌で感じる。

「 A 海と出会い、なかよくなる b 」

- ・地域で捕れた魚に触れて遊ぶ楽しさを親子で味わいながら、様々な発見や気付きを楽しみ、好奇心や探求心を高める。
- ・地域の海に関わる仕事をする人との関わりを通し、海に関する仕事について知るとともに、働く人への親しみと憧れの気持ちをもつ。

「 B 海の恵みを知る b 」

- ・地域の海で捕れる魚について知るとともに、気仙沼の海の豊かさに触れ、地域の海を大切に思う気持ちをもつ。

「 B 海の恵みを知る C 」

- ・地域の海で捕れた魚をさばく様子を見学することで食への関心を高め、海の恵みや大切な命をいただくことの感謝の気持ちに気付く。



緑の真珠プロジェクト

～見つめよう大島 考えようわたしたちの海～

1 キーワード

- 3 学年 若木浜, 十八鳴浜, 田中浜散策
- 4 学年 若木浜散策, ワカメの養殖体験
- 5 学年 カキの養殖体験, 他地域交流 (駒場小学校)
- 6 学年 ホタテの養殖体験, 海洋教育サミット

2 海洋教育のねらい

- (1) 児童が海とかわかり, 海を見つめなおす意識と態度を育むこと
- (2) 自分たちの住んでいる郷土を知り, 誇りと愛着を育むこと。
- (3) 海的环境や資源, 海を取り巻く人や社会との深いつながりについて関心を高め, 持続可能な海とのかかわり方について進んで考え, 行動することができる児童を育むこと。

3 海洋教育のねらい設定に込めた思い・背景

- (1) 海の側で生きる我々が, 日々海から受けている恵みの偉大さに気づき, 大切にしようとする態度を育んでほしい。
- (2) 大島は, 水上不二が「緑の真珠」と表現したように, 豊かな緑と貴重な砂浜, 磯に囲まれた, 海とともに生きる海洋地区になっている。自分たちの暮らす地域の自然の豊かさを知り, 誇りをもってほしい。
- (3) 人間は便利な暮らしや豊かさを求めるあまり, 海を汚し, 環境を破壊している現状にある。諸活動を通して海の豊かさを知り, それを持続させるため, 気仙沼, 日本, 世界の海を守ろうとする態度を育んでほしい。

4 今年度, 海洋教育に取り組んで達成したことや充実を感じたこと

- ・今年度は海洋教育の導入として, 3 年生でも浜の散策等を行った。生き物探しや, ごみ拾いを通して海と関わることで, 大島の海について興味・関心を高めた児童が多くいた。
- ・昨年度同様, 大島漁協青年部の方々にご協力いただき, 4 年生がワカメ, 5 年生がカキ, 6 年生がホタテの養殖体験を行った。そこから, 各学年が実態に応じた課題をもち, 調べ学習や地域の講師の方々との関わりを通して, 児童一人一人が海に対する問いをもち, 探究的に学びを深めることができた。
- ・他校との交流活動 (5 年・東京都 駒場小学校 6 年・海洋教育サミット in 東北) を通して, 自分たちが学習してきたことを相手に伝えたり, 自分たちの取組とは違う地域の活動を知ったりすることで, ふるさと大島のよさや, 海によって様々な地域や人がつながっていることを改めて感じる事ができた。



3年：田中浜の清掃活動



3,4年：若木浜での生き物調査



4年：ワカメの養殖体験



5年：カキの養殖体験



6年：ホタテの養殖体験



5年：駒場小との交流

5 海洋教育に関して困っていること、今年度、課題に感じたこと

- ・副読本は、調べるというよりはきっかけづくりに適しているため、体験活動の事前事後指導として活用することはできたが、他の目的として使用することが難しかった。来年度は、更なる活用法を検討する必要がある。

6 ツールについて

(1) ツールの名前：「気仙沼市海洋教育副読本」

(2) 使ったタイミングや状況

- ・体験学習の事前事後指導
- ・児童がなかなか海に対する問いがもてないとき
- ・教科指導の中で海洋教育を行うとき

海洋教育全体計画

(海洋教育の目標)

1. 海洋教育を通じて、児童が海とかかわり、海を見つめ直す意識と態度を育む。
2. 海洋教育を通じて、自分たちの住んでいる郷土を知り、郷土への誇りと愛着を育む。
3. 海洋教育を通じて、海の環境や資源、海を取り巻く人や社会との深いつながりについて関心を高め、持続可能な海とかかわり方について進んで考え、行動することのできる児童を育む。

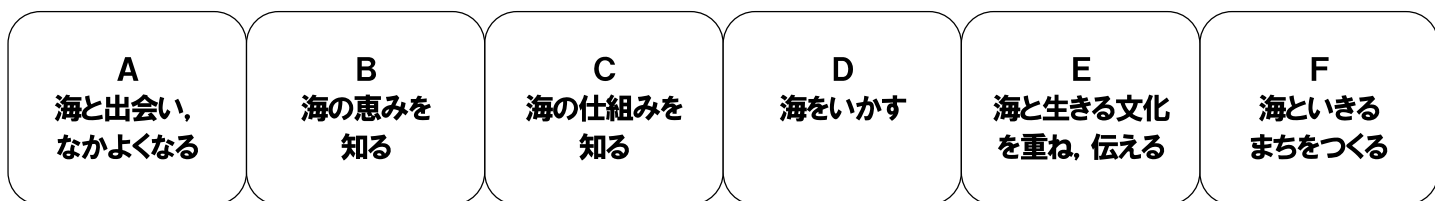
(本校の教育目標)

「志高く 主体的に学び
育つ 児童の育成」
～おおきな心 広い視野
まけない体 の大島つ子を
目指して～

(児童の実態)

- ・明るく素直である。
- ・課題に対してまじめに取り組む。
- ・主体的に考え、行動する力が足りない。
- ・思考の多様性、表現力に課題がある。

【 海洋リテラシー for 気仙沼における6つの大原則 】



【 海洋教育学習の内容(1・2年生は生活科との関連)(3年生以上は,総合的な学習の時間との関連) 】

学年/観点	海と出会い, なかよくなる	海の恵みを知る	海の仕組みを知る	海をいかす	海と生きる文化を重ね, 伝える	海と生きるまちをつくる
1年	○砂浜での貝殻集め, 作品作成					
2年	○島内探検(町探検を含む)					
3年	○若木浜散策(生き物調べ)	○生き物調べを基にしたポスター作り	○十八鳴浜の清掃 ○田中浜の清掃			
4年		○ワカメ養殖体験学習	○ワカメ養殖に関連した課題設定とまとめ		○大島の養殖業について	○ワカメ養殖体験学習
5年		○カキ養殖体験学習	○カキ養殖に関連した課題設定とまとめ	○駒場小との交流	○大島の養殖業について	○カキ養殖講話 ○カキ養殖体験学習
6年		○ホタテ養殖体験学習	○ホタテ養殖に関連した課題設定とまとめ	○海洋教育サミット	○大島の養殖業について	○ホタテ養殖体験学習 ○「海と生きる」について考える
全学年	○海に親しむ集い					

※気仙沼市海洋教育副読本を活用し指導にあたる。

※各教科の中にも海洋教育の理念を進んで取り入れ,積極的に実践する。

※写真データを中心に実績を蓄積し,次年度の活動に生かす。(職員室共有フォルダー内に保存)

※専門機関の連携として,協定先の東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターより指導助言や資料提供を受けることができる。(TEL:03-5841-4395)

第3学年海洋教育単元開発計画 ※月は、指導開始時期の目安

教科	海と出会いたいな、わたしのすきな時間	月	海の恵みを知る	月	海の仕組みを知る	月	海をいかす	月	海と生きる文化を重ね伝える	月	海と生きる町をつくる	月
国語	【話したいな、わたしのすきな時間】 海で遊んだ経験（海水浴、釣り、生き物探し等）について、スピーチをしたり、聞いたりする。	11	【調べて書こう、わたしのレポート】 大島の海や磯で見付けた生き物について、知りたいことを調べる。 【自分の考えを伝えよう】 大島について調べたことを整理してまとめ、資料を見せながら紹介する。	6								
理科							【こん虫を調べよう】 水辺の生物が川や海 の環境と関わって生 きていることに気付 き、環境保全への関心 を高める。	9				
社会	【学校のまわり】 展望室から学校の東 西南北を見渡し、大島 が海に囲まれている ことを確認する。 (副読本p16)	4			【市の様子】 気仙沼港のまわりの 様子を調べ、気仙沼湾 の特徴（漁船が多い、 整備された市場、湾の 形、加工場や冷凍庫が 多い等）を把握する。	4	【工場の仕事】 ささかまほこ等の原料が外 国の海でも獲られているこ とを知り、外国とのつながり について気付く。 【店ではたらく人】 地産地消を知り、店で売られ ている魚介類を話し合う。	6				

教科外	総合	【磯の生き物と自然 とのかかわり】 磯での安全な活動や 生き物の見つけ方を 知り、若木浜で磯の生 き物探しを行う。 〈副読本 p8〉	5 ・ 6	【磯の生き物と自然 とのかかわり】 若木浜の地形的特徴 から、どのような生き 物がいるのかを調べ、 観察カードにまとめ る。〈副読本 p8〉	5 ・ 6	【ユズの花観察】 ユズの木の根元にホ タテの貝殻がばらま かれていて、その理由につ いて、話し合う。	6	【十八鳴浜清掃】 ・震災により、浜は被害 を受けたが、様々な方々 の努力で鳴き砂を取り 戻したことを知る。 〈副読本 p44〉	10	【田中浜清掃】 田中浜の様子か ら、大島の環境に ついて知る。 〈副読本 p44〉	11
	学活	【給食センターにお 礼をしよう】 地元の食材を進んで 取り入れようとする 思いについて考える。	1								
	行事	【海に親しむ集い】 砂の造形を行い、ふる さとの海を五感で感 じ取る。 〈副読本 p6, 44〉	7	【地震・津波避難訓 練】 津波の恐ろしさを知 り、安全な避難の仕方 を身に付ける。 〈副読本 p37〉	6			【地震・津波避難訓練】 東日本大震災につい ての話を聞く。 〈副読本 p37〉	6		

第4学年海洋教育単元開発計画 ※月は、指導開始時期の目安

教科	国語	海と出会いなかよくなる	月	海の恵みを知る	月	海の仕組みを知る	月	海をいかす	月	海と生きる文化を重ね伝える	月	海と生きる町をつくる	月
		海と出会いなかよくなる 【調べたことを報告しよう】 調べたい話題として、海での遊びを設定し、アンケート調査を行う。結果をもとにポスターを作り、発表する。	2			【説明のまとまりを見つけよう】 ヤドカリとイソギンチャクの他にも共生している海の生き物を調べ、文章のまとまりに気を付けながらまとめる。 〈副読本 p10〉	5			【学校についてしようかい することを考えよう】 海と深く関わっている学校の特徴についてまとめ、紹介する文章を書く。	9	【聞いてほしいな、心に残っている出来事】 海での活動経験を通じて考えたこととそ の理由を友達に伝える文章を書く。	11
	理科					【水のすがたと温度】 ・海を含めた自然の中の水が常に蒸発していることを知る。 ・「けあらし」の現象について考察し、自然の中の水のすがたの変化をまとめる。 【物の体積と温度】 暖流と寒流の位置関係で対流が起きることを実験で確かめ、三陸沖がよい漁場になっている理由を考察する。	1 11						
	社会					【水はどこから】 森は海の恋人運動について調べ、水源の森と海の水の関係について捉える。 〈副読本 p19〉	5			【地震からくらしを守る】 東日本大震災の出来事や、それを受けた気仙沼市の地震対策について調べ、まとめる。 〈副読本 p38〉	9		

教科外	総合	【大島の海について調べよう】 大島の海について興味をもち、課題を設定する。	4	【ワカメ養殖】 養殖業に携わる人々の努力や工夫を知り、自分たちの生活が海や、海に携わる人々の手によって支えられていることを知る。 〈副読本p30〉	11	【磯の生き物と自然とのかかわり】 若木浜の地形的特徴から、どのような生き物がいるのかを調べ、観察カードにまとめる。〈副読本p8〉	5	【ワカメ養殖】 ・ワカメの種付け ・ワカメの刈り取り ・ワカメの芯抜き ・塩蔵ワカメの袋詰め 大島の自然のよさを伝え、自分たちにできることをまとめ、ポスター等を製作する。 〈副読本p24～26〉	11			
	学活			【給食センターにおける礼をしよう】 地元の食材を進んで取り入れようとする思いについて考える。	1				9	【防災グッズの有効性について知ろう】 地震や津波の被害とそれらに対する備えについて、普段の生活を振り返り、必要な行動や物について話し合う。		
	行事	【海に親しむ集い】 砂の造形を行い、ふるさとの海を五感で感じ取る。 〈副読本p6, 44〉	7			【地震・津波避難訓練】 津波による被害を知り、安全な避難の仕方を身に付ける。 〈副読本p37〉	6					

第5学年海洋教育単元開発計画 ※月は、指導開始時期の目安

教科	海と出会いなかよくなる	月	海の恵みを知る	月	海の仕組みを知る	月	海をいかす	月	海と生きる文化を重ね伝える	月	海と生きる町をつくる	月
国語					【環境問題について報告しよう】 水温上昇、水質汚濁など海に関する環境問題について調べる。また、自分が取り組むことについて報告する。	6						
理科			【魚のたんじょう】 海水の中のプランクトンを観察して海水の水質保全について考える。	6	【天気の変化】 天気の変化に伴う海の様子の変化について話し合う。 〈副読本 p13〉 【台風と天気の変化】 台風の発生場所が海の上であることを知り、台風の発生が海上の水蒸気と関係があることに気付く。	4			【流れる水のはたらき】 川の周辺や河口周辺に住む人たちが災害に対してどのような備えをしているかを調べる。	10		
社会			【水産業のさかんな地域】 日本の周りの海でとれるいろいろな魚介類や三陸沖の漁場が、世界三大漁場とされる豊かな海であることを知る。 〈副読本 p17〉	9	【これからの食料生産とわたしたち】 安心・安全な水産物を育てるには、自然環境を守ることが大切であることを話し合う。 生活排水が水産物にどのような影響をもたらすかについて考え、改善のために自分たちができていることを話し合う。	11	【世界の中国土】 地球儀や地図上で国土の広がりや領土、領海について調べる。領土問題を考え、1つの島の領有を複数の国が必死に主張する理由を知る。	4			【水産業のさかんな地域】 水産業の発展に必要な港町の施設について調べ、これからの気仙沼の町づくりについて自分の考えをもつ。	9

第6学年海洋教育単元開発計画 ※月は、指導時期の目安

教科	海と出合いなかなくなる	月	海の恵みを知る	月	海の仕組みを知る	月	海をいかす	月	海と生きる文化を重ね伝える	月	海と生きる町をつくる	月
国語											<p>【町の未来をえがこう】</p> <p>大島の未来について、新聞やインターネットで調べたことをもとに、プレゼンテーションを行う</p> <p>【話し合って考えを深めよう】</p> <p>大島の直面する課題（海の仕事の後継者、人口流出、観光客の減少）を解決するために、学級で協議する。</p>	10
理科					<p>【生き物のくらしと環境】</p> <p>生き物には「食べる」「食べられる」という関係があることを身近な海の魚介類を通して学ぶ。</p> <p>【水溶液の性質とはたらき】</p> <p>水溶液には、気体が溶けているものがあることを学び、海の酸性化について考える。</p>	6		<p>【大地のつくり】</p> <p>若木浜で化石が見つかるという事実を根拠にして、大島の大地のつくりを推論する。</p>	9	<p>【地球と私たちの暮らし】</p> <p>人を含めたいろいろな生き物が地球（海をテーマにした場合）からどのような恩恵を受けて生きているか、私たちの暮らしが地球にどのように影響するかを考える。</p>	4	
社会							<p>【日本とつながりの深い国々】</p> <p>外国から海を介して届くものには、どのようなものがあるかを調べる。</p>	2	<p>【震災復興の願いを表現する政治】</p> <p>復興に向けた県や市、そして大島の取組について話し合う。大島小としての願いにも触れる。</p>	5	<p>【世界の未来と日本の役割】</p> <p>環境問題について調べ、持続可能な海の開発について自分の考えをもつ。</p>	3

教科外	総合				7	【ホタテ養殖】 ホタテ養殖の工夫や苦勞を知り、自分たちの生活が海や、海に携わる人々の手によって支えられていることを知る。 〈副読本p30〉					1	【大島の海と生きる】 これまで学習してきたことを生かして、「大島の海と生きる」について、自分の考えをもつ。 〈副読本p46〉		
	学活				7						7	【ホタテ養殖】 ・採苗ネット作り ・洋上での筏見学 ・稚貝の生長観察 〈副読本p24～26〉 【海洋教育サミット】 自分たちの学習してきたことを発信することで、気仙沼の海に誇りをもち、また、他地域の海洋教育にふれることで、気仙沼の海との共通点や相違点に気付く。		
	行事	【海に親しむ集い】 砂の造形や遠泳を行い、ふるさとの海を五感で感じ取る。 〈副読本p6, 44〉			6						10	【防災マップを作ろう】 東日本大震災の時の水位や被害を踏まえ、防災マップを作成する。		

第4学年1組 海洋教育学習指導略案

日 時：令和4年5月13日（金）

指導者：阿部 智輝

1 授業について

単 元 名	国語科 「説明のまとまりを見つけよう」
単元の目標	国語：調べたことを文章のまとまりに注意して書くことができる。 海洋：共生関係にある海の生き物について知る。（リテラシー 海の仕組みを知る）
本時の目標	○共生関係にある生き物について調べ、内容のまとまりに分けることができる。

2 指導過程（8/11時）

段階	主な学習活動	教師の主な支援 ・指導上の留意点 ◇副読本の活用	リテラシー の評価
導入 10分	1 全文を音読する。 2 ヤドカリとイソギンチャクの共生関係について振り返る。 3 本時のめあてを確認する。	・段落ごとの内容を意識しながら、音読をするよう伝える。 ・ヤドカリとイソギンチャクは、お互いにどのようなことを助けていたのかを振り返る。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">共生関係にある海の生き物について調べ、内容のまとまりに分けよう。</div>			
展開 30分	4 学習の見通しをもつ。 5 共生関係にある海の生き物を調べる。 6 調べたことを、内容ごとに分ける。	◇副読本 p10 から、海には共生している生き物がたくさんいることを伝え、自分たちで調べる見通しをもたせる。 ・本やタブレットを使って調べさせ、調べたことをノートにまとめさせる。 ・共生関係にある生き物の名前だけでなく、どのように助け合っているのかも調べさせる。 ・教科書や副読本を例に、絵や図もあると分かりやすいことを伝える ・自分が調べたノートに書いたものを、内容ごとに、いくつかグループに分けさせる。仲間分けが難しい児童には、教師が声掛けをする。	海の生き物同士のつながりに興味をもち、共生関係にある生き物について進んで調べている。（ノート、観察）
終末 5分	7 本時の学習を振り返る。 8 次時の予告をする。	・どんな生き物が共生関係にあったのかを発表し合う。 ・次回は、調べた内容を文章でまとめることを伝える。	

3 リテラシーの評価規準

A 十分満足できる	海の生き物同士のつながりに興味をもち、共生関係にある生き物について進んで調べている。
C リテラシーを育むための手立て	海の生き物たちが、互いに助け合っている様子の画像や動画を見せることで、異なる種類の生き物同士が助け合っているという、自然の美しさを感じさせる。

ふるさと気仙沼の海

1 キーワード

- ① 5 学年 ② 多様な体験活動 ③ 個人探究

2 海洋教育のねらい

- (1) 海の豊かな自然と親しむ活動や、身近な地域社会の中で海とのつながりを感じられるような体験活動、海について調べる活動、その保全活動などの体験を通して、海に対する豊かな感受性を培い海に対する関心を高める。
- (2) 海洋環境、水産資源、船舶運輸など海洋と人間の関係及び海を通じた世界の人々との結びつきについて理解させ、持続可能な社会の形成者としての、資質、能力、態度を養う。

3 海洋教育のねらい設定に込めた思い・背景

近年、地球温暖化による海水温の上昇や海の酸性化など海の環境に関する問題が顕在化し、生態系への影響はもちろん、我々の生活にも様々な影響が及んでいる。このような問題は身近な気仙沼の海も例外ではない。今後もふるさと気仙沼の海と生きるためにどのようなことができるかについて自分の考えを持ったり、発信したりすることで一人一人が自らの生活や行動に生かすことができるようになってほしいという願いを込めて海洋教育の目標を設定した。

本校の海洋教育は5学年を中心として展開される。気仙沼の海について体験学習や見学を通して、興味や関心をもち、児童一人一人がさらに調べたいと思うことを探究課題として設定し、課題を解決していく活動を通して、本校で設定した海洋教育の目標達成を図る。

4 今年度、海洋教育に取り組んで達成したことや充実を感じたこと

- 気仙沼の海に触れ、課題を見いだせるように多くの体験活動を設定した。岩井崎での生き物調査、遠洋まぐろ延縄漁船の乗船・見学、水山養殖場の見学など、五感をフルに活用しながら体験をすることで、より気仙沼の海を身近に感じさせることができた。
- 体験学習のみならず、海に関わるトピックの講話を聞く機会も多く設けた。白福本店の社長さんからMSC認証についての講話、環境教育出前講座など専門家から直接話を聞き、探究活動につなげることができた。特に前者の講話については、事前に講師と打合せを行い、「海と生きるを学ぶガイドブック」を効果的に用いて実施することができた。



【岩井崎での生き物調査】

5 海洋教育に関して困っていること、今年度、課題に感じたこと

- 体験と体験の時期が近くなってしまったので、事前指導と事後指導の時間を十分に確保できなかった。外での活動も多いので、調整が難しい面もある。年度始めに計画をしっかりと立て、見通しをもって取り組む必要がある。
- 「海と生きるを学ぶガイドブック」を見通しをもって活用したかった。本副読本を使用しての指導が昨年度に始まったばかりで、手探りな面もあったので、次年度は今年度をベースにして見通しをもって使用したい。



【カキ養殖場見学】

6 ツールについて

(1) ツールの名前：「海洋教育副読本」



(2) 使ったタイミングや状況：教師が授業場面で使用する他にも、講師と学習のねらいを共有し、講話の中でも活用していただいた。（資料上）また、掲載されているQRコードを読み込んで、探究のまとめの場面で活用した。（資料下）

海洋教育全体計画

1 目標

- (1) 海の豊かな自然と親しむ活動や、身近な地域社会の中で海とのつながりを感じられるような体験活動、海について調べる活動、その保全活動などの体験を通して、海に対する豊かな感受性を培い海に対する関心を高める。
- (2) 海洋環境、水産資源、船舶運輸など海洋と人間の関係及び海を通じた世界の人々との結びつきについて理解させ、持続可能な社会の形成者としての、資質、能力、態度を養う。

2 方針

- (1) 生活科や総合的な学習の時間を基盤として、各教科領域と海洋との関連を整理し、教育活動を推進する。
- (2) 面瀬川や面瀬川河口、尾崎漁港を学習フィールドの中核に据え、探究的な学習を進める。
- (3) 地域・大学・専門機関との連携を継続し、学習活動や学習プログラムの質を高める。

3 海洋教育に関わる主な内容（教科領域別）

教科領域	主な内容
生活科	(第1学年) ○おもせのしき ○はなややさいをそだてよう ○いきものとなかよし (第2学年) ○生きものなかよし大作せん
総合的な学習の時間	(第3学年) ○面瀬の生き物調査隊 ○みんなに伝えよう面瀬の生き物たち（発表会） ○面瀬川水族館 ○面瀬生き物図鑑を作ろう (第4学年) ○面瀬川調査隊(森川海のつながり) ○ワカメ養殖体験 ○面瀬川を守ろう，教えよう（発表会） (第5学年) ○海の学習会 ○海の調査隊 ○海の調査隊中間発表会 ○海洋教育こどもサミット ○ふるさと気仙沼の海発表会 (第6学年) ○ふるさと調査隊 ○SDG s 学習会 ○気仙沼のまちづくり ○ふるさと気仙沼の未来発表会
社会科	(第3学年) ○はたらく人とわたしたちの暮らし ○市の様子と人々の暮らしのうつりかわり (第4学年) ○水はどこから ○ごみのしよりと利用 (第5学年) ○水産業のさかんな地域 ○わたしたちの生活と森林 ○かんきょうを守るわたしたち
理科	(第3学年) ○物の重さをくらべよう (第4学年) ○自然の中の水の姿 ○物の体積と温度 (第5学年) ○流れる水のはたらき ○物のとけ方 (第6学年) ○大地のつくり ○水溶液の性質とはたらき
特別の教科道徳	(第5学年) ○ペンギンは水の中を飛ぶ鳥だ ○イルカの海を守ろう

別添資料 2 海洋教育の年間指導計画

5年 海洋教育指導計画 【 】内はリテラシーとの関係

単元名	「ふるさと気仙沼の海」
単元の目標	海や水産業から課題を見出し、探究をする。海洋環境について考えたことや漁業復興への思いを発信する。また海と生きていくために自分たちに何ができるのか考え、実践しようとする態度を育む。
指導の重点	(1) 海の豊かな自然にふれる体験活動を通して、海に親しむをもたせる。また、「海と生きる」を学ぶガイドブックの積極的な活用を図る。 (2) 海の環境について調べる活動やその保全活動などの体験を通して、海の環境保全に主体的にかかわろうとする思いをもたせる。 (3) 水産物や海を通して世界の人々との結びつきについて理解し、それらを持続的に利用することの大切さを理解させる。

	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月					
学習活動	<p>海の学習会① 〈海の幸と気仙沼〉 ・気仙沼魚市場</p> <p>・三陸の海 【B：海の恵みを知る】 【C：海の仕組みを知る】</p>	<p>海の調査隊② 〈養殖場見学〉 ・水山養殖場 【D：海をいかにす】 ・九鳴き浜 【A：海と出合い、仲良くなる】</p>	<p>海の学習会② 〈海洋プラゴミの現状〉 ・流入を防ぐ方策 ・調査 【C：海の仕組みを知る】</p>	<p>一次調査 (夏休み) ・情報収集 ・情報共有 ・整理、分析</p>	<p>海の調査隊③ 〈魚市場見学〉 ・気仙沼新魚市場 ・漁船見学 【B：海の恵みを知る】 【D：海をいかにす】</p>	<p>海の調査隊④ 〈課題探究〉・海の豊かさ・持続可能な漁法・環境問題等 中間発表会での課題を受けて探究活動を広げたり、深めたりする。 中間発表会は、7学年部も関わり、視点を共有した上で助言を行うようにする。 二次調査は、それらを踏まえて行う。</p>	<p>海の学習会③ 〈持続可能な漁法〉 ・環境配慮型の漁法 ・MSC認証 【D：海をいかにす】</p>	<p>海洋教育子どもサミット in 東北 (まとも①) 【E：海と生きる文化を重ね、伝える】 【F：海と生きる町をつくる】</p>	<p>ふるさと気仙沼の海発表会 (まとも②) 【E：海と生きる文化を重ね、伝える】 【F：海と生きる町をつくる】</p>	<p>課題設定①</p>	<p>世界の国土 〈社会科〉</p>	<p>水産業のさかんな地域 〈社会科〉</p> <p>ペンギンは水の中を飛ぶ鳥だ〈道徳科〉</p>	<p>流れる水のはたらき 〈理科〉</p>	<p>ものつけ方 〈理科〉</p>	<p>わたしたちの生活と森林 〈社会科〉</p>	<p>環境を守るわたしたち 〈社会科〉</p>
関連する教科学習	イルカの海を守ろう〈道徳科〉															

第5学年1組 総合的な学習の時間学習指導案

日時 令和4年12月16日 第6校時
場所 5年1組教室
指導者 教諭 西村 春香

1 単元名 ふるさと気仙沼の海

2 単元目標

- 海や水産業から課題を見出し、探究をする。海洋環境について考えたことや漁業復興への思いを発信する。また海と生きていくために自分たちに何ができるのか考え、実践しようとする態度を育む。

3 評価規準

【知識・技能】

- ・ 磯や生き物や生態系に関心を持ち、気仙沼の海が豊かであることを理解している。
- ・ 自らの探究課題を解決するために、情報検索・情報収集や収集した情報を分類・分析するスキルを身に付けている。
- ・ PCやタブレット等を活用するスキルや発表のための資料作成に必要なスキルを身に付けている。

【思考・判断・表現】

- ・ 体験や学習を通して、海や水産業に関する課題を見出し、課題に対して自分の考えを持っている。
- ・ 海と生きるために自分たちにできることを多面的な視点から考えている。
- ・ 探究したことや自分の考えをポスター、研究レポートなどにまとめ、発表を通して考えを深めている。
- ・ 設定した課題について自分の言葉で説明し、相手に伝わるような説得力のある表現方法を工夫している。

【主体的に学習に取り組む態度】

- ・ 難しいと思うことでも、失敗を恐れずに前向きに考え、他者とも協働しながら活動しようとしている。
- ・ 他者の発言を真剣に聞き、自分の興味関心に目を向けて、学びとつなげようとしている。
- ・ 環境や地域のために自分たちができることを考え、実践しようとしている。

4 単元について

(1) 単元観

本単元は、気仙沼の海について体験学習や見学を通して、興味や関心を持ち、児童一人一人がさらに調べたいと思うことを探究課題として設定し、課題を解決していく活動を通して、本校で設定した【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に物事に取り組む態度】を育成することをねらいとしている。

近年、地球温暖化による海水温の上昇や海の酸性化など海の環境に関する問題が顕在化し、生態系への影響はもちろん、私たちの生活にも様々な影響が及んでいる。このような問題は身近な気仙沼の海も例外ではない。今後もふるさと気仙沼の海と生きるためにどのようなことができるかについて自分の考えを持ったり、発信したりすることで一人一人が自らの生活や行動に生かすことができると考える。このような学びの姿は、本校研究主題である「自分の考えをもち、行動する児童の育成」の達成に迫るものであると考える。

(2) 児童の実態 (男子12名 女子21名 計33名)

5学年児童を対象に行ったルーブリック評価(各評価要素の観点に対して児童自らが現状を4段階で自己評価する)による意識調査では、「気仙沼の海がこうなってほしいなあという思いや願いをもっている。」の観点に関して、3.1という高い平均値が出た。身近に海があることや海に関する職業に従事している人が身近にいることなどが関係してこのような結果になったと考える。一方で、「海がかかえている課題が分かり、自分の言葉で語っている。」の観点に関しては1.8という低い平均値が出た。課題は分かっているものの自分の言葉で語るところに自信が無かったり、課題が何なのかが分からなかったりということも考えられる。自信の無さについて、自己肯定感についての項目「難しいことでも失敗を恐れず粘り強く取り組むことができる。」では2.3という低い平均値であった。総合的な学習の時間にかかわらず、他の教科の学習においても自信がない様子が見られるため、本単元を通して、自らの課題を解決する過程や成果を児童と共に認めながら学習を進めていく必要があると考える。

(3) 指導にあたって

以上のことから、本単元では次のような手立てを工夫し、指導にあたりたい。

- ① 児童の興味関心を学習活動へとつなげるための工夫【つなげる】
 - ・見学や体験などを通して五感で気仙沼の海に触れさせ、興味や関心を高められるようにする。
 - ・疑問があれば、すぐにタブレット等で調べる習慣をつけさせ、様々な情報を目にしたり聞いたりする機会を増やす。
- ② 調べ方・聞き方等のスキルを高める指導【調べる】
 - ・国語科で身に付けてきた聞き方を想起させ、何に注目して聞くのかを確かめながら聞くように声を掛ける。
 - ・本、新聞、インターネット、インタビュー、アンケートなどの調べるための手段は様々であることを教師から積極的に提供する。
- ③ 児童の気付きや考えを共有・整理する機会の設定【広げる】
 - ・自らの反省を友達同士で共有し、その反省を自分事としても考え、自分だったらどうするかを考える時間を設ける。
 - ・児童の発言や経験を掲示物等で見える化し、整理しやすくする。
- ④ 習得した知識・技能を活用・発信する場の設定【使う】
 - ・中間発表会や本発表会の機会を設け、探究してきた成果を確認できるようにする。
 - ・自分の成果や考えを多くの方に向けて発信することで、自分自身の学びが変容したり、成長したりしたことに気付けるようにする。

5 指導と評価の計画 (70時間扱い 本時50/70)

次	時(月)	探求段階	主な学習活動	バランス ※探究との関わり		評価規準
				習得	in	
第一次サイクル	6 (4月~5月)	オリエンテーション	オリエンテーション <u>これまでの学習を振り返る</u> ・4年生までに総合的な学習の時間で学んだことを振り返り、海との関わりを考え、1年間の学習の見通しをもつ。 海の学習会① <u>海や産業に関する探究活動への意欲をもつ</u> ・気仙沼魚市場や三陸の海について調べる。	習得	in	【知識・技能】 ・磯や生き物や生態系に関心をもち、気仙沼の海が豊かであることを理解している。
			※インターネットや図書等を参照して調べ、海や産業への関心をもつ。			

<p>第 一 次 サ イ ク ル</p>	<p>20 (6月～7月)</p>	<p>体験・調査・基礎学習・課題設定</p>	<p>海の調査隊① 磯（岩井崎）で生き物を観察し、 環境の豊かさに気付く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岩井崎の潮だまりで磯観察や生き物調査をする。 ・見つけた生き物の名前や特徴を調べる。 <p>海の調査隊② 水山養殖場の見学と講話を通し、 山川里海のつながりに気付く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・唐桑の水山養殖場で養殖いかだや干潟を観察する。 ・食物連鎖を支える植物プランクトンを知る。 <p>海の調査隊③ マグロ船を見学し、水産業の苦労や工夫について考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最新鋭の新造船の設備を知る。 ・持続可能な漁法を知る。 <p>海の学習会② 講話を通し、これからの水産業について考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白井壯太郎さんから環境に配慮したマグロ漁について講話を聞く。 ・MSC認証や海のエコラベルについて知り、持続可能な漁業について考える。 ・SDGsと水産業の関わりに気付く。 <p>課題設定をする。</p>	<p>習得・活用</p> <p>in</p> <p>※見学や講師の話を通じて、海洋等について理解を深める。</p> <p>※感じたことや考えたこと、興味をもったことを課題設定につなげられるようにする。</p> <p>※視点を与えて課題の設定を促す。</p>	<p>【知識・技能】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・磯や生き物や生態系に関心を持ち、気仙沼の海が豊かであることを理解している。 <p>【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験や学習を通して海や水産業に関する課題を見出し、課題に対して自分の考えを持っている。
		<p>情報収集①・整理分析①・まとめ・表現①</p>	<p>24 (8月～12月)</p>	<p>海の調査隊 興味をもった事柄について調べ、 理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の疑問や興味に基づく調査研究を行い、交流を通し、課題を明確にする。 ・調査計画を立てる。 ・得られた情報を取捨選択する。 <p>中間発表 調べたことについて伝えたいことを明確にし、情報を選択し、表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表資料の作成を分担し、スライド等を作成する。 ・発表会に向けてリハーサルをする。 ・学習したことを発表する。質疑応答を通して、内容についての理解を深める。 ・発表会を振り返り、新しく気付いたことを整理する。(本時) 	<p>習得・活用</p> <p>i / o</p> <p>※課題解決のためにはどのような情報が必要か見通しをもち、情報を収集する。</p> <p>※効果的な発信の方法を話し合い、話し合ったことを基に発信方法をまとめる。</p> <p>※第1時サイクルから成果として得たことや課題として残ったことをおさえ、第2時サイクルへとつなげる。</p>

					<p>まとめ、発表を通して考えを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> 設定した課題について自分の言葉で説明し、相手に伝わるような説得力のある表現方法を工夫している。 <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 難しいと思うことでも、失敗を恐れずに前向きに考え、他者とも協働しながら活動することができる。 他者の発言を真剣に聞き、自分の興味関心に目を向けて、学びとつなげようとしている。 環境や地域のために自分たちができていることを考え、実践しようとする。
第二次サイクル	20(1月～3月)	<p>情報収集</p> <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> 整理分析 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> まとめ 表現 <p>②</p>	<p>海の調査隊</p> <p>学習を振り返り、海のために実践していきたいことを考え、実践する</p> <ul style="list-style-type: none"> 中間発表会をもとに、再調査をする。海や水産業のために実践していきたいことを話し合う。 自分たちのプランを決め、実践する。 <p>海の調査隊</p> <p>学習の成果をまとめ、保護者や地域等に向けて発信する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習したことや実践したこと、自分たちの主張を再構築し、発表する。 1年間の学習を振り返り、新しく気付いたことや自分の成長を確かめる。 	<p>習得・活用</p> <p>i / o</p> <p>※課題を見直し、問題解決のために必要な情報かどうかをかんがえながら整理する。</p> <p>※アンケートやインタビュー等を行い、探求の新たな視点を得る。</p> <p>※第1次サイクルからの成果を継続し、2次サイクルで深めたことを含めて成果を発表する。</p>	

6 本時の指導

(1) 本時の目標

- 中間発表会の反省を友達と共有することを通して、第二次調査に向けた研究計画の見通しを立てることができる。

(2) 指導の手立て

- ① 中間発表会の反省を共有する時間を作り、どうすればよいのかグループで話し合うことを通して、今後の研究の見通しを立てられるようにする。また、これらの取組みを意味づけ、価値づけすることで二次調査の意識を高めていく。
- ② 今後の研究に生かせるスキルを新たに手に入れたことが実感できるような掲示物等を準備する。

(3) 評価とその方法

評価規準	A (十分に満足できる)	B(おおむね満足できる)	△ (努力を要すると判断される状況)
<ul style="list-style-type: none"> 他者の発言を真剣に聞き、自分の興味関心に目を向けて、学びとつなげようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 	<ul style="list-style-type: none"> 他者の発言を聞き、自らの考えと比較して相違点や共通点を見出し、反省点を解決するための考えをさらに深めている。 (行動観察・発言) 	<ul style="list-style-type: none"> 他者の発言を聞き、様々な考えに触れ、反省点を解決できる方法について自分の考えを持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの反省点を解決する方法を考えられず、自分の考えをもつことができない。
			(C) の児童への指導の手立て <ul style="list-style-type: none"> グループの人の発言を聞き、自分の反省点を解決できるかどうか一緒に考える。

(4) 準備物

- 【教師】 タブレット、ワークシート、模造紙、付箋、プロッキー、学びの足跡、スキルカード
 【児童】 筆記用具、総合ファイル、タブレット

(5) 学習過程 (別紙)

(6) 板書計画



(7) 資料

(5) 指導過程

段階	主な学習活動 ○発問 ・予想される児童の反応	指導上の留意点	準備物 評価 (方法)
導入 10分	1 これまでの学習を振り返る。 2 本時の見通しをもつ。 3 本時の課題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 中間発表会の反省から今後の研究の見通しを持つ。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・体験学習や見学の写真や、そこでの学びを掲示する。 ・学習の流れを掲示し、見通しを持って学習できるようにする。 ・中間発表会での反省から、今後の研究をどのように進めていくか見通しを持つ時間とする。計画は次時に立てさせる。 ・中間発表での自己の課題についてさらに深めたり広げたりすることが学び方のスキルであることを確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの足跡 (写真等) ・身に付けたスキルカード
展開 30分	4 自己の反省とその解決方法について確かめる。 5 自分の反省点を共有する。(10分) ○自分の反省点についてグループで共有しよう。同じところや違うところがあるかアンテナを張って聞こう。 6 グループで出た反省点について解決策を考える。(10分) ○グループで出た反省はどうかすれば解決できるかを話し合おう。 ・分からないことはもっと調べる ・インターネットの他にも本を読んで調べたほうが良いと思う。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時までで中間発表の反省と、その反省をどのように解決していくのかを書いたワークシートを確かめさせる。 ・あらかじめ教師側で決めたグループにさせ、反省点を共有させる。 ・反省点を共有する際には、相違点や共通点があるかどうか意識を向けさせた上で聞くようにする。 ・あらかじめ自分で考えた解決方法を発表したり、友達の考えを聞いたりして、今後の調査計画に生かせるヒントを得られるようにする。 ・教師は机間指導しながら、児童の発言や考えを認めて価値付け、新たな考えや方法について提供し、児童の引き出しを増やせるように声掛けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・模造紙 ・付箋 ・プロッキー <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・難しいと思うことでも、失敗を恐れずに前向きに考え、他者とも協働しながら活動することができる。 ・他者の発言を真剣に聞き、自分の興味関心に目を向けて、学びとつなげようとしている。(行動観察・発言)
まとめ 5分	7 本時の学習を振り返る。 8 次時の活動について知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの反省点や解決策を話し合うことも探究活動に必要な時間であることを確認する。 ・次時では本時を生かして、今後の研究計画を立てて整理する時間であることを知らせ、見通しを持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スキルカード (本時で得たもの) (教師から提供するもの)

海洋教育のテーマ

海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう

1 キーワード

- ・プロジェクト型学習・・・テーマに基づいて設定した課題を解決するためのプロジェクトを中学生の視点で考える。
- ・地域資源・・・地域にあるさまざまな素材（人材を含めて）を活用する視点で考える。
- ・試行錯誤・・・自分たちで考えたプランが達成可能かどうか、実際に試しながら考え、動く。

2 海洋教育のねらい（【 】内は海洋リテラシーとの関わり）

本校では、以下のねらいを定めて、海洋教育の活動に取り組み、生徒の資質・能力の育成を図っている。

- (1) 「海」を視点とし、ふるさとのよさを見つけ、テーマに沿った課題設定することができる。
【D (a・b・d)】
- (2) 自ら設定した課題を解決するためにどのような方法を用いるのか自ら検討し、調べ学習や体験学習にとどまらない活動を実施できる。
- (3) 各教科や海洋教育副読本で身に付けた専門知識や情報を比較したり関連付けしたりして問題解決に向けて考えることができる。【A (a)・B (a・b)】
- (4) 地域の一員としての自覚を持ち、郷土を愛する心を培い、現在そして将来、生まれ育った地域や自分の住む場所の未来を考えることができる。【F (b・c・d)】

3 海洋教育のねらい設定に込めた思い・背景

本校の目の前には日本有数の海水浴場大谷海岸が存在している。東日本大震災により一時閉鎖されていたが、令和3年に再開され、賑わいを取り戻しつつある。大谷海岸の目の前には「道の駅大谷海岸」もあり、さまざまな地元の海産物が販売され、多くの観光客を集めている。また、漁港も学区内に抱えており、生徒の家族には漁業に従事している家庭もある。こうしたことから生徒たちは「海」を身近に感じる環境にあるといえる。

本校では、海洋教育挑戦校として「海」を中心に据え、「なみま」と名付けた総合的な学習の時間に「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、活動しよう」というテーマの下、各学年で着目点を設定し、それに基づきながら、個人課題を設けて、地域を活気づけるための方法について、探究を進めた。

探究的な活動を進めていく上で地域の方々に協力をいただきながら活動を進めてきたが、地域の方々はたいへん協力的であり、「地域の子ども」として考え、温かく接してくれている。そうした方々の願いや思いを感じながら、地域の一員としての自覚を育むことができると考える。

4 今年度、海洋教育に取り組んで達成したことや充実を感じたこと

中学生として、さまざまな視点から地域について考え、行動することで、生徒の中に地域への愛着と

それを大事にしようという気持ちが育っていると感じる。課題を設定する段階からその解決の手立てを考える過程では、自分たちの考えをまとめ行動に移すまでに時間を要したが、何をすべきか明確になると自ら進んで役割を担い、活動する姿が見られた。まさに探究的な活動であり、生徒がテーマに基づいて、試行錯誤しながら、成果や課題を見出せたことはよかったと思う。試してみてもうまくいかなかった場合、メンバーと協力しながら他の方法を模索するなど、思考の幅が広がる様子も見られた。

生徒とともにゴールを目指して取り組みを進めていく形になり、教員にとっても学びとなることが多々あった。また、コロナ禍においては行事に地域の方々をお招きすることは避けているが、授業の中では地域の方々と関わり、対話する場になっており、非常に貴重な機会であった。この点については、生徒のみならず教員側にとっても大きなプラスの効果を生んでいると考える。特に「道の駅大谷海岸」の存在は大きく、生徒たちの考えについて、ご意見をいただき、道の駅で開催されるイベントに参加させていただくなど、さまざまご協力をいただき、生徒たちが成長する機会をいただいた。

12月に行われた成果発表会では、学年ごとに保護者に対して、自分たちで調べてきた成果を発表した。保護者は感心するとともに、子どもたちの成長を感じていたようである。



5 海洋教育に関して困っていること、今年度、課題に感じたこと

本校の総合的な学習の時間では、各学年で【着目点】のみが設定されており、生徒たちは、4月のオリエンテーションを経て、自分たちの取り組む方向を決めている。そのため、活動当初は最終的なゴールの姿が見えていない状況である。探究的な活動を進める過程で課題を設定し、その解決のためにどのような行動をすればよいか手立てを考え、試行錯誤しながら、地域がより活気づくためのプロジェクトを考えることとなる。

このような活動を進めていく上で、教員が海洋リテラシーをより意識することで、課題設定の視野が広がり、生徒たちへのアドバイスもより効果的なものになると考えられる。また、副読本の活用を今以上に広げていくことで、生徒たちの視野も広がり、新たな発見や気付きにもつながるものとする。また、今年度は、成果発表会を12月に行ったが、対象は保護者の方々であった。新型コロナウイルス感染症の影響がなくなれば、今後は地域の方々や授業の中でお世話になっているの方々への発表もできるように検討していきたい。

6 ツールについて

(1) ツールの名前：『副読本「海と生きる」を学ぶガイドブック』

(2) 使ったタイミングや状況

①総合的な学習の時間・社会科・理科

なみまの時間や関連する社会科や理科の授業で使用した。

②全体計画の作成

全体計画の作成の際に内容を参考にしながら進めた。



3 海洋教育の実践例

(1) 活動の様子から

① 3 学年



② 2 学年



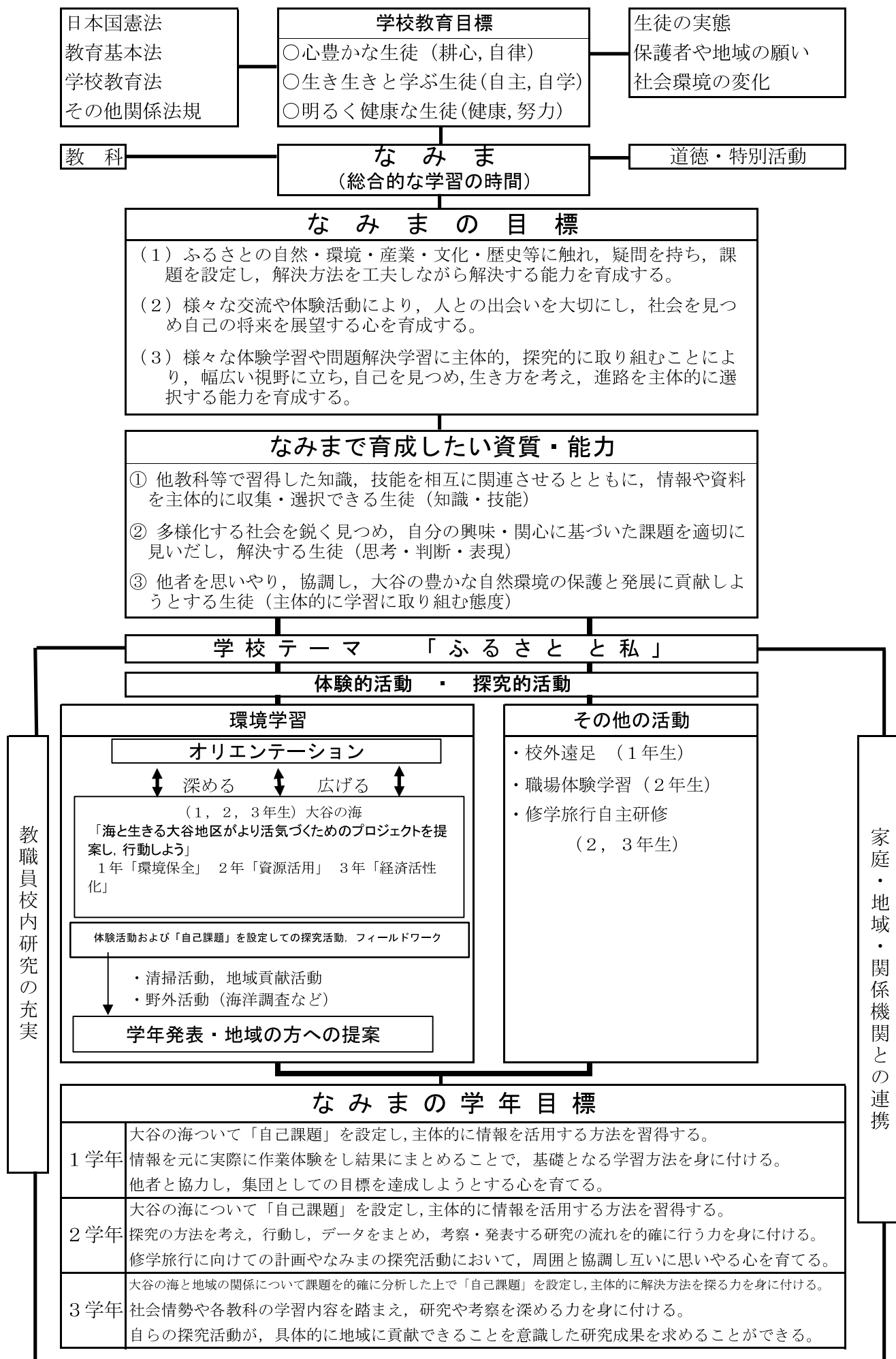
③ 1 学年



④ 4 月なみま発表会



総合的な学習の時間 全体構想図



気仙沼市立大谷中学校 1学年「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」ストーリーマップ

【着目点】

環境保全：海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう

【実践のねらい】

地域、自然を活用した様々な活動を通して、大谷の海と山の関係から地域のよさを知り、「海と生きる大谷地区が活気づくため」のプロジェクトを提案し、行動する実践力を育む。そのために、地域企業の方々や研究者の方々に講師になっていただき、私たちのくらしと海の関係についての学習活動の他に、海藻養殖、磯焼け、ウニの畜養の実態、大谷の各漁協（魚市場）に水揚げされる魚種調査、大谷道の駅での養殖したウニの販売などの調査・体験活動を踏まえた探究学習を行う。それらの活動・学習を通して、自分たちの生きる地域の魅力について知り、地域に対する愛着を深める。

○時数 4月から12月（総合的な学習の時間50、理科，社会科）※他教科は次年度以降に関連項目で実施する。

○関連 理科，社会科，技術・家庭科

○目標 (1) 与えられた課題を解決するためにどのような方法を用いて課題解決に迫るか自ら検討し，調べ学習や体験学習にとどまらない活動を実施できる。

(2) 「海」を視点とし，様々な問題状況の中から，小課題を発見・設定することができる。

(3) 各教科で身に付けた専門知識や情報を比較したり関連付けたりして問題解決に向けて考えることができる。

(4) 地域の一員としての自覚を持ち，郷土を愛する心を培い，現在そして将来，生まれ育った地域や自分の住む場所の未来を考えることができる。

主 な 連 携 機 関	内 容
大谷道の駅	地域企業の事業と山と海の関係の学習，養殖
大谷漁協，三島漁協，赤牛漁協	大谷の各漁協（魚市場）に水揚げされる魚種調査や復興に関するインタビューなど，海藻養殖，磯焼け対策
東京海洋大学	磯焼け対策の実際と具体的な手立てに関する講義
お茶の水女子大学湾岸研究センター	ウニの発生，ウニはどのように大きくなるか ※教材の提供
北日本水産	アロビの稚貝，アロビの養殖
気仙沼市立大谷小学校	授業参観，拡大校内研修会
本吉共同調理場	大谷の物産を生かした新メニューの開発，給食での提供，
大谷地区コミュニティ協議会	海岸清掃，地域貢献活動
はまわらす	地域のNPO法人で磯焼けやウニなど幅広く活動
(株) 咲幸物産	ドローンで空撮や水中撮影から磯焼けを見る。
水産試験場	貝毒研究，貝毒調査

日程	4月	5月	5～7月	8月	9～11月	12月
オリエンテーション 企画書作成	企画書関係 関係機関とのアポイント 活動開始	調査活動 探究活動	フィールド ワーク実施	調査活動 探究活動	まとめ＆発表 大谷公民館での成果発表会	

プロジェクト型学習 「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」（50時間）

オリエンテーション
① 昨年までの取り組みを知る（教員）
② 地域を知る。（まちづくり委員会，道の駅駅長など）
③ 地域の取り組みを知る。（パネルデイスカッション）
④ 課題をとらえる。（それぞれについて課題を知り，班編制実施）

現状を知る！
課題意識を持つ！

企画書作成
企画書を作成し，見通しの中で何をどのように調査するかなどの日程を自分たちで計画立案。

調査活動
各関係機関と連携しながら，体験活動や調査活動を実施し，そこから大谷中学生としてできるところを提案する。
※インターネットによる調べ学習で終わる学習形態を少なくする！

課題設定：オリエンテーションを経て，自分で課題設定し，プロジェクトを立ち上げる！
＜課題例＞※以下の課題は教師側からは与えない。あくまで生徒の課題意識から設定。
A：海洋ゴミを減らすために大谷海岸をきれいにして，たくさんの人と協力して達成しよう！
B：地球温暖化対策として，中学生にできることを考え行動しよう！
C：磯焼けを止め，海藻を増やすために行動を起こせ！

成果発表および提案
地域の人や学習に携わった方々，報道機関を招致して，大人に提案する！
地域の方と連携して取り組んだことを発表し，更に協力を依頼する！

企画書作成
企画書を作成し，見通しの中で何をどのように調査するかなどの日程を自分たちで計画立案。

調査活動
各関係機関と連携しながら，体験活動や調査活動を実施し，そこから大谷中学生としてできるところを提案する。
※インターネットによる調べ学習で終わる学習形態を少なくする！

企画書作成
企画書を作成し，見通しの中で何をどのように調査するかなどの日程を自分たちで計画立案。

調査活動
各関係機関と連携しながら，体験活動や調査活動を実施し，そこから大谷中学生としてできるところを提案する。
※インターネットによる調べ学習で終わる学習形態を少なくする！

他教科との 関連	<p>【理科】 ・わかめとめかぶ遊走子の観察&海藻の生活史，・天気の変化を予想しよう，気象災害への備え，パンプウニを用いた稚ウニ変態，セキツイ動物の出現と進化，ウニの有性生殖と発生&継続観察による飼育</p> <p>【社会】 ・世界から見た日本の姿，日本の諸地域，北海道地方</p> <p>【技術・家庭科】 ・パソコン技術，地域の恵みを使った調理実習，持続可能な社会を考える</p>
-------------	---

気仙沼市立大谷中学校 2学年「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」ストーリーマップ

【着目点】

資源活用：資源活用に関わることをテーマに、地域が元気になるための活動を考え、行動しなさい！

【実践のねらい】

地域、自然を活用した様々な活動を通して、大谷の海と山の関係から地域のよさを知り、「海と生きる大谷地区が活気づくため」のプロジェクトを提案し、行動する実践力を育む。そのために、地域企業の方々や研究者の方々から講師になっていただき、私たちのくらしと海の関係についての学習活動の他に、海藻養殖、磯焼け、ウニの畜養の実態、大谷の各漁協（魚市場）に水揚げされる魚種調査、大谷道の駅での養殖したウニの販売などの調査・体験活動を踏まえた探究学習を行う。それらの活動・学習を通して、自分たちの生きる地域の魅力について知り、地域に対する愛着を深める。

○時数 4月から3月（総合的な学習の時間50、理科、社会科）※他教科は次年度以降に関連項目で実施する。

○関連 理科、社会科、技術・家庭科

○目標 (1) 与えられた課題を解決するためにどのような方法を用いて課題解決に迫るか自ら検討し、調べ学習や体験学習にとどまらない活動を実施できる。

(2) 「海」を視点とし、様々な問題状況の中から、小課題を発見・設定することができる。

(3) 各教科で身に付けた専門知識や情報を比較したり関連付けたりして問題解決に向けて考えることができる。

(4) 地域の一員としての自覚を持ち、郷土を愛する心を培い、現在そして将来、生まれ育った地域や自分の住む場所の未来を考えることができる。

主 な 連 携 機 関	内 容
大谷道の駅	地域企業の事業と山と海の関係の学習、養殖
大谷漁協、三島漁協、赤牛漁協	大谷の各漁協（魚市場）に水揚げされる魚種調査や復興に関するインタビューなど、海藻養殖、磯焼け対策
東京海洋大学	磯焼け対策の実際と具体的な手立てに関する講義
お茶の水女子大学湾岸研究センター	ウニの発生、ウニはどのように大きくなるか ※教材の提供
北日本水産	アワビの稚貝、アワビの養殖
気仙沼市立大谷小学校	授業参観、拡大大谷内研修会
本吉共同調理場	大谷の物産を生かした新メニューの開発、給食での提供、
大谷地区コミュニティ協会	海岸清掃、地域貢献活動
議会	
はまわらす	地域のNPO法人で磯焼けやウニなど幅広く活動
(株) 咲幸物産	ドローンで空撮や水中撮影から磯焼けを見る。
水産試験場	貝毒研究、貝毒調査

日程	4月	5月	5～7月	8月	9～11月	12月
オリエンテーション 企画書作成	企画書関係 関係機関とのアポイント 活動開始	調査活動 探究活動	フィールド ワーク実施	調査活動 探究活動	まとめ＆発表 大谷公民館での成果発表会	

プロジェクト型学習 「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」（50時間）

オリエンテーション

① 昨年までの取り組みを知る（教員）
② 地域を知る。（まちづくり委員会、道の駅駅長など）
③ 地域の取り組みを知る。（パネルデイスカッション）
④ 課題をとらえる。（それぞれについて課題を知り、班編制実施）

現状を知る！

課題意識を持つ！

企画書作成

企画書を作成し、見通しの中で何をどのように調査するかなどの日程を自分たちで計画立案。

調査活動

各関係機関と連携しながら、体験活動や調査活動を実施し、そこから大谷中学生としてできるところを提案する。
※インターネットによる調べ学習で終わる学習形態を少なくする！

成果発表および提案

地域の人や学習に携わった方々、報道機関を招致して、大人に提案する！
地域の方と連携して取り組んだことを発表し、更に協力を依頼する！

プロジェクト型学習 「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」（50時間）

オリエンテーション

全体1 学級2 (海と地域資源を知る)

課題設定：オリエンテーションを経て、自分で課題設定し、プロジェクトを立ち上げる！

<課題例> ※以下の課題は教師側からは与えない。あくまで生徒の課題意識から設定。
A：大谷の丸大芋を栽培し、日本一の大谷芋の復活を目指した地域おこしの実施。
B：ウニや海藻を活用して商品開発を行い、地域おこしの実施。
C：ウニの殻を使ったウニランプの作成を通して、地域資源の活用。
D：アワビの殻を使った工芸品の作成。

他教科との 関連	<p>【理科】 ・わかめとめかぶ遊走子の観察&海藻の生活史、・天気の変化を予想しよう、気象災害への備え、バフンウニを用いた稚ウニ変態、セキツイ動物の出現と進化、ウニの有性生殖と発生&継続観察による飼育</p> <p>【社会】 ・世界から見た日本の姿、日本の諸地域、北海道地方</p> <p>【技術・家庭科】 ・パソコン技術、地域の恵みを使った調理実習、持続可能な社会を考える</p>
-------------	---

気仙沼市立大谷中学校 3学年「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」ストーリーマップ

【着目点】
 経済活性化：3年間のまとめとして、環境保全、地域資源の活用の2つの観点から、地域が元気になる催し物を考え、実際に道の駅などで企画し、実施する。

【実践のねらい】

地域、自然を活用した様々な活動を通して、大谷の海と山の関係から地域のよさを知り、「海と生きる大谷地区が活気づくため」のプロジェクトを提案し、行動する実践力を育む。そのために、地域企業の方や研究者の方々に講師になっていただき、私たちのくらしと海の関係についての学習活動の他に、海藻養殖、磯焼け、ウニの畜養の実態、大谷の各漁協（魚市場）に水揚げされる魚種調査、大谷道の駅での養殖したウニの販売などの調査・体験活動を踏まえた探究学習を行う。それらの活動・学習を通して、自分たちの生きている地域の魅力について知り、地域に対する愛着を深める。

○時数 4月から3月（総合的な学習の時間50、理科、社会科）※他教科は次年度以降に関連項目で実施する。

○関連 理科、社会科、技術・家庭科

○目標 (1) 与えられた課題を解決するためにどのような方法を用いて課題解決に迫るか自ら検討し、調べ学習や体験学習にとどまらない活動を実施できる。

(2) 「海」を視点とし、様々な問題状況の中から、小課題を発見・設定することができる。

(3) 各教科で身に付けた専門知識や情報を比較したり関連付けたりして問題解決に向けて考えられることができる。

(4) 地域の一員としての自覚を持ち、郷土を愛する心を培い、現在そして将来、生まれ育った地域や自分の住む場所の未来を考えられることができる。

主 な 連 携 機 関	内 容
大谷道の駅	地域企業の事業と山と海の関係の学習、養殖
大谷漁協、三島漁協、赤牛漁協	大谷の各漁協（魚市場）に水揚げされる魚種調査や復興に関するインタビューなど、海藻養殖、磯焼け対策
東京海洋大学	磯焼け対策の実際と具体的な手立てに関する講義
お茶の水女子大学湾岸研究センター	ウニの発生、ウニはどのように大きくなるか ※教材の提供
北日本水産	アロビの稚貝、アロビの養殖
気仙沼市立大谷小学校	授業参観、拡高校内研修会
本吉共同調理場	大谷の物産を生かした新メニューの開発、給食での提供、
大谷地区コミュニティ協議会	海岸清掃、地域貢献活動
はまわらす（株）咲幸物産	地域のNPO法人で磯焼けやウニなど幅広く活動
水産試験場	ドローンで空撮や水中撮影から磯焼けを見る。 貝毒研究、貝毒調査

日程	4月	5月	5～7月	8月	9～11月	12月
オリエンテーション 企画書作成	企画書関係 関係機関とのアポイント 活動開始	調査活動 探究活動	フィールド ワーク実施	まとめ＆提案 大谷公民館での成果発表会		

プロジェクト型学習 「海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し、行動しよう」（50時間）

オリエンテーション

- ① 昨年までの取り組みを知る（教員）
- ② 地域を知る。（まちづくり委員会、道の駅駅長など）
- ③ 地域の取り組みを知る。（パネルディスプレイカシジョン）
- ④ 課題をとらえる。（それぞれについて課題を知り、班編制実施）

現状を知る！

課題意識を持つ！

企画書作成

企画書を作成し、見通しの中で何をどのように調査するかなどの日程を自分たちで計画立案。

調査活動

各関係機関と連携しながら、体験活動や調査活動を実施し、そこから大谷中学生としてできるところを提案する。

※インターネットによる調べ学習で終わる学習形態を少なくする！

発表活動

地域の人や学習に携わった方々、報道機関を招致して、大人に提案する！

地域の方と連携して取り組んだことを発表し、更に協力を依頼する！

大谷公民館などで地域住民に提案する。

他教科との関連

【理科】・わかめとわかめぶ遊走子の観察と海藻の生活史・天気の変化を予想しよう、気象災害への備え、パフウニを用いた稚ウニ変態、セキツイ動物の出現と進化、ウニの有性生殖と発生と継続観察による飼育

【社会】・世界から見た日本の姿、日本の諸地域、北海道地方

【技術・家庭科】・パソコン技術、地域の恵みを使った調理実習、持続可能な社会を考える

学年	単元名（教科・領域）	単元のねらい	既存の授業実践と副読本との接続の発見
2年	日本の地域的特色と地域区分 (社会 ・ 地理的分野)	自然環境, 人口, 資源・エネルギーと産業, 交通・通信に基づく地域区分を踏まえ, 日本の 国土の特色を大観させ, 理解させる。	防災・減災の実践例や産業の具体例を参 考にした。
展開	主な学習活動	活用の仕方／活用上の留意点	副読本活用のねらい・効果 活用する内容・機能・ページ
導入 (問い)	<ul style="list-style-type: none"> 日本の地形や気候, 自然環境にはどのような特徴があるのか, 意見を出し合う。 地形, 気候の特徴について 自然災害について 資源・エネルギーについて 産業について 	<ul style="list-style-type: none"> 気仙沼市で行われている, 防災・減災のための取り組みについて調べる。 気仙沼の海を中心とした産業には, どのようなものがあるか調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な地域で, 様々な面から防災・減災のための取り組みが行われていることに気付かせる。 第一次産業から第三次産業まで多様な仕事に関わり合っ成り立っていることに気付かせる。
展開 (探究)	<ul style="list-style-type: none"> 交通・通信について 地域区分について これまでの学習を振り返り, 日本 の地域的特色を文章にまとめる。 		<ul style="list-style-type: none"> <調べ学習に活用> p.37 災害リスクと防災・減災について調べよう <調べ学習に活用> p.31 多様な仕事を調べ, 互いのつながりを考えよう
まとめ (深化・発展)			

実践を振り返って

副読本を読んで, 身近なところで防災・減災の取り組みが行われていることを実感した生徒が多く, 中学生にもできることがあると気付いたり, 学習内容を自身の生活と関連付けて考察させたりすることができた。また, 本単元は, 日本各地の特色を大観することをねらいとしているもの, 気仙沼市の海を中心とした産業の広がりについて知ること, 他の地域の産業も同様に関わり合っ成り立っているのだからと仮説を立てたり, 他の地域の主な産業に興味を持って探究しようとする姿が見られた。

学年	単元名（教科・領域）	単元のねらい	既存の授業実践と副読本との接続の発見	
1～3年	海と生きる大谷地区がより活気づくためのプロジェクトを提案し行動しよう（総合的な学習の時間）	地域、自然を活用した活動を通して地域のよさを知り、大谷地区を活性化させるためにプロジェクトを提案し行動する実践力を育む。	生徒が暮らすまちが記載されている箇所を参考にした。	
展開	<p>主な学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション ・地域の方からお話を聞いて 2 課題設定 ・テーマを決めよう 3 企画書作成 ・活動の流れをきめよう 4 調査活動 ・地域の方に行く ・校外学習に行って調べる ・インターネットで調べる ・調理して試す ・企画を修正する 	<p>活用の仕方／活用上の留意点</p> <p>オリエンテーションで、地域の方からお話を聞く事前学習として基本的な知識を身に付けさせる。これからの課題を見つけていることが重要だと生徒に伝える。</p> <p>副読本に記載された課題のみだけでなく、それをきっかけとして新たな課題を発見できるように働きかける。</p> <p>各章のポイントをヒントにして、どのように調査していくのか、多角的に課題を捉えさせて考えさせる。</p>	<p>副読本活用のねらい・効果</p> <p>震災後のまちづくりを客観的に捉えさせ、地域をより活性化させようとする態度を育む。</p> <p>自然環境だけでなく、国際化など、気仙沼の産業に新しい課題があることに気付かせる。</p> <p>小学校において、総合的な学習の時間で学んできたことを生かしてどのように学習していくかのイメージを持たせる。</p>	<p>活用する内容・機能・ページ</p> <p>p.40～F章 海と生きるまちをつくる「気仙沼大谷地区がどのようなようにつくられているか」</p> <p>p.43～F章 新しい課題の発見「気仙沼のまちの新しい課題」 「各園、各校の活動例」 幼稚園～中学校の系統的な学習の内容の把握</p> <p>p.8～B章 海の恵みを知る「海の資源」 「生命と環境とのつながり」</p>
まとめ（深化・発展）	<ul style="list-style-type: none"> 5 成果発表および提案 ・誰に発信するか決める ・何を伝えるのか決める ・振り返る 	<p>はじめに読んだところを振り返り、記載されていることその他に、実際に体験して考えたことや提案したいことをまとめさせる。</p>	<p>課題に対してどのようにアプローチできたか振り返らせ、今後どのように課題と関わっていくのかを考えさせる。</p>	

実践を振り返って

オリエンテーションでは、震災後の大谷海岸を復活させるために、誰がどう行動してきたのかについて地域の方からお話を聞いた。事前学習で副読本を活用したことによって、大谷地区をどのような「まち」にしたいか考えてから講話を聞くことができた。震災後、防潮堤が作られ海岸が復活したことにより、行楽シーズンになると多くの人々が大谷海岸を訪れることから、まちづくりの一環として活動していくことに意欲的である様子が見られる。副読本では、各園・各校の活動が多く紹介されていることから、気仙沼市民として今後も海とかわかっていくことを意識して、学習に臨むことが期待される。